

*Sir Gawain and the Green Knight* の wheel 行における語順

早稲田大学大学院 鈴木哲治

Marie Borroff の '*Sir Gawain and the Green Knight*': *A Stylistic and Metrical Study* (New Haven, Conn. and London, 1962) 等、SGGK の頭韻を踏む長行の「語順」と「韻律」の関係についての研究は多様である。しかしながら、'wheel' に関する分析については研究の余地を残している。

3 強勢を持つ 'wheel' は bob と共に ababa という脚韻を踏み、長行での展開にコメント等を述べる役割を果たし、一般的に行頭の音節に強勢がなく、リズムは主として上揚になるという。

上記のような韻律上の制約によって、まず動詞句がどのような品詞で強勢音節を持つか、またどのような品詞で脚韻を踏むかに注目し、その類型を分析する。

その上で第一に動詞句がどのような語順を形成するかを分析する。具体的には動詞には自動詞と他動詞のどちらが用いられているのか、動詞の後に続く要素としてはいかなる要素があるかを検証する。また動詞が他動詞の場合は目的語として代名詞が用いられるのか、普通名詞が用いられるのかを韻律の制約という観点から考察する。第二に上記動詞句と類似の韻律・統語構造を持つ異形体としてどのような異形体が存在するか、その類例を提示する。第三に 'wheel' 行の語順について文単位の分析をする。文には単文、複文、重文がある。それぞれの文の形態にどのような類型が存在するかを考察する。また韻律上の制約を受けることによって、それぞれどのように主語、動詞の語順が影響を受けるか、また主語に代名詞を使用するか或いは普通名詞ないしは固有名詞を用いるかを検証する。また前述の動詞句の場合と同様に、動詞の後に続く要素としてはいかなる要素があるかを検証し、動詞が他動詞の場合には、目的語として代名詞が用いられるのか普通名詞が用いられるのかを、韻律の制約という観点から考察する。

Laȝamon's *Brut* の写本 MS. Cotton Caligula A. ix における文法的性消失

——名詞に呼応する人称代名詞 *hine, hire* の考察——

岐阜県立加茂農林高等学校常勤講師 田中敦子

南西中部方言で書かれた Laȝamon's *Brut* は語尾の水平化が進んで、かなり後の時期（13 世紀）の作品である。にもかかわらず、文法的性を示す語尾 *-ne, -re, -um, -(e)s* がはつきりと残存する。特に、二つの写本の内、MS. Cotton Caligula A. ix は、それより 50 年後に書かれた MS. Otho C. xiii より多く、*-ne, -re, -um, -(e)s* を残す。

MS. Cotton Caligula A. ix においては、今まで名詞を直接修飾する限定詞・指示詞・形容詞語尾に、文法的性の消滅の誘因を求められ、研究されてきた。その結果、格組織としての役割に重点が置かれていることは、既に指摘されている。しかしながら、名詞とそれと呼応する人称代名詞を同時に考察することは、未だ殆ど研究されないままである。

文法的性を語尾に示す人称代名詞 *hine, hire* を取り上げ、無生名詞を優先に調べる。結果として、文法的性は幾つかの男性・女性名詞に存在することがわかり、無生名詞の男性・女性名詞の呼応状態と比較すると、有生名詞が自然性に殆ど呼応することもわかってくる。無生名詞の人称代名詞 *hine, hire* は、古英語期の文法的性のみを示す。また、OE の辞書で、mf. と表示されている *hul* でさえも、男性名詞でしかない。

女性名詞 *burh* の一時的な男性化が、唯一、例外として見られる。この一時的男性化が起こる場合、その名詞を修飾する限定詞などに、女性名詞を示す屈折語尾が名詞の前に置かれる。このことから、男性名詞がこれから先も、文法的性を維持し、女性名詞においては、維持が困難になると推測できる。

#### 「壁を越える人、越えない人 ---- Chaucer の *Troilus and Criseyde*」

白百合女子大学教授 春田節子

グローバルな規模で電波が飛び交う世の中になっても、壁はまだ重要なイメージのようです。境界線としての壁をせつせと作る人たちや壊す人たち、本の題名に使って大ヒットさせる人や、さらにそれをマクラに使って学会発表をしようなどと思う人まで出てきます。

百年戦争の真っ只中、14 世紀のヨーロッパの人々にとっては、もちろん壁はただのイメージではなくて、今そこにある危機に対して、大切な、そして即物的な役割を果たしていました。敵軍に包囲され、籠城する側にとって、城壁は命に関わる大問題。壁がしっかり存在するかぎり、身の護りと生命の安全は保障されますが、同時に外界から遮断され、閉じ込められる、という閉塞状態に耐えねばなりません。人々は、この壁が持つ二面性を強烈に意識しながら暮らしていたことでしょう。この点は、古代メソポタミアからギリシャ・ローマの世界とも同じでしたから、トロイ戦争やテーバイ攻略の話を語り直した中世・ルネッサンスの文学作品の中に、私たちは、城壁に対する人々の変わらぬ思い入れを感じ取ることができます。

10 年間の包囲戦を持ちこたえた、とされる有名なトロイの城壁は、Geoffrey Chaucer 作 *Troilus and Criseyde* で、即物的な壁として、そしてシンボルとして、重要な役割を果たしています。籠城したトロイの人たちにとって、壁が破壊され、トロイが陥落する以前に城壁を越えるか越えないか、がまさに生死の分かれ目になるからです。主要な登場人物について、彼らの選択と行動、そしてその結果について考察したいと思います。

## シンポジウム：「Ricardian Poets の言語」

はじめに

下笠徳次

Gower, Langland, Chaucer, Gawain-Poet が活躍した 14 世紀後半は中世英文学が華と開いた時代であった。Chaucer 自身、Richard II(1367-1400, 在位 1377-99)の庇護を受け、公人としてその才能を十分に発揮できる機会を与えられた。特に外交使節として 2 度に亘る大陸（イタリアとフランス）への旅行は後の輝かしい文学上の経歴に計り知れない影響をもたらすことになった。政治にしても芸術にしてもある 1 つのまとまった時代に際立った才能が集中するのは歴史の証明するところであるが、この Richard II の時代も例外ではなかった。これらの詩人たちはあるいは意識しあい、その才能を競いあったかもしれない。少なくとも Chaucer は 'moral Gower' と言及している。古英語の頭韻による詩作は依然として続き、Langland の寓意詩 *Piers the Plowman* や *Sir Gawain and the Green Knight* に代表されるロマンスなど多くの作品を見ることができる。Gower はラテン語、フランス語、英語の 3 つの言語で作品を残しているが、このことは当時の言語事情を反映している。*Confessio Amantis* の中で英語の復権を説いている箇所があり、興味深い。

これら 4 人の詩人達の活躍とは別に、素朴な一般大衆を聴衆の対象として書かれたのがロマンスである。Chaucer は当時流行していたロマンス群を揶揄して *Sir Thopas* の話をしているが、自らの作品の中に随所にロマンスに頻出する言葉を使っている。*The Miller's Tale* ではロマンスの英語の借用が効果的である。ロマンスはいわば「周辺に位置する」ジャンルであるが、豊穡さを増していく文学の言語、という観点からは決して侮れない。

Gawain-Poet を除く 3 人の大詩人の言語とロマンスの言語が互いにどのように絡み合っているのか、補完しあっているのかを論じてみたい。なお、ロマンスはちょうどこの時代最も流行した 12 行で 1 連から成るテイルライムロマンスに限定したい。

## Romance の言語

山口県立大学教授 下笠徳次

Chaucer は *Sir Thopas* の話も終わろうとする第 3 節第 2 連で、

Men speken of romances of prys,  
Of Horn child and Of Ypotys  
Of Beves and sir Gy,  
Of sir Lybeux and Pleyndamour ---

Bur sir Thopas, he bereth the flour  
Of roial chivalry!

とロマンスの名前を6つ挙げているので読んだことが証明できる。ME期には主として3つの流れ --- 1) short couplets のロマンス、2) 12行1連から成る tail-rhyme stanza のロマンスと、3) alliterative long-line のロマンスがあり、ある特定の時期には地方言と詩形とが特別な対応を示していることが多い。13世紀末から15世紀半ばまで主としてイングランド北部で流行したのは2)に属するロマンス群で、写本に現存するのは23作品で、*Sir Thopas* の引用の中では *Horn childe and Maiden Rimnild*, *Guy of Warwick*, *Lybeaus Desconus* の3つがこの範疇に該当する。Chaucer は1)に属する長編ロマンス *Sir Beues of Hamtoun* も読んだことがわかる。3)に属するロマンスにも精通していたと思われる。詩行の中で効果的に頭韻から成る語句を用いている箇所が随所に見られる(例: *The Knight's Tale* や *Legend of 'Cleopatra'* の戦いの描写において)。

ロマンスの言語は「定型表現」(formulas) から成り立っている、ということを力説したい。最も popular な脚韻形式は aabccbddbeeb で、特に b-line に特徴的な定型表現が頻出することがわかっている。節単位のものから句単位のものへ、そして語単位のものへと論を展開していくことにする。

そしてこれらのロマンスの英語が他の Ricardian Poets の英語の中にどのように入りこんでいるかを見てゆきたい。

#### John Gower の言語

愛知学泉大学教授 菅野正彦

これまで、Gower の *Confessio Amantis* に対して手厳しい批評がなされたが、W.P.Ker は好意的に「Gower の言語は決して無理なところがなく、上品さ以外の何物でもない」と述べ、更に「彼の言葉遣いには、特に目を見張るものはないが、それでも人を引き付けるのは単純さと平易さによる」[*Quarterly Review*, 197 (1903), p.441]と賞賛する。

作品の冒頭で、Gower は「中道を行き、娯楽と教訓の中間の書物を書くつもりだ」と意図を述べる：

I wolde go the middle weie  
And wryte a bok between the tweie,  
Somwhat of lust, somewhat of lore. (Prol. 17-19)

更に、「英語でものを書く人が少ないので、英国のために本を作る」とも明言する：

And for that few men endite  
In oure englissh, I thenke make  
A bok for Engelondes sake. (Prol. 22-24)

注目すべきは「中道」「英語」「英国のために」等の言葉である。また、彼の言語は”pleine”を旨とし、また”pleine”と修辞学とが密接に関連している。

### William Langland の言語

専修大学教授 松下知紀

Langland の言語にはどのような特徴が存在するか検討したい。

#### A. 消極的な評価

(1) He [= Langland] has few of their [= the poets of “Alliterative Revival,” such as the *Gawain*-poet] mannerisms of diction, syntax, and phraseology, and little consciousness of an alliterative *ars poetica*. His style has its own kinds of energy and particularity, ... and niceties of language as well as versification give way to the urgency of communicating his vision. (Kirkpatrick ed. 1991: 838)

#### B. 積極的な評価

(2) Langland can use colloquial language and vivid detail to create energetic portraits of the contemporary scene; (Godden 1990: 1)

本発表では、Langland の言語の特徴を頭韻型、頭韻語とアレゴリーの観点から考察する。

(3) 頭韻型の独自性 : aaAx (5129), aaaAx (324), aa(A)xx (248), aaaXx (71)

(4) 頭韻語の平明さ: conscience (131), men (126), god (112), man (107), love (106), Crist (103), lord (98), kynde (96), lyf (90), seide (92), so (87);

(a) OE origin: kyng (82), lawe (<ON \*lagu, 75), come (69), mede (67), right (65), alle (64), folk (61), leve (61), wit (60)

(b) OF origin: grace (73), mercy (70), reson (66), peple (57), riche (49), pacience (47)

(5) アレゴリー : Abstinence を(a) Glutton's aunt (B.5.384), (b) Truth's maid (B.5.620), (c) abbess (B.7.133) のように擬人化

### Chaucer の言語と'mixed feelings' --- 発話過程に着目して

広島大学教授 中尾佳行

中世詩人の力量は、**convention** を独自の文脈に溶解させ、それをいかに **innovation** へと転調できるかに問われる。このことはとりわけ円熟した文化の中の **Ricardian Poets** に当てはまる。**Burrow (1971: 14)**が当代詩人達には'**mixed feelings**'があるという所以である。一見平易な表現が詩人の発話過程を通して陰影を増し、個性溢れる表現として具現する。ここには **convention** という静的な言語知識の同定では捉えられないもの、つまり知識と具現された発話を結びつける詩人の発話過程、動的な意味生成過程が関与している。動的であるということは、仮に同じ言語表現を用いても、詩人の個性や彼らが前提とする文脈の種類により、その味付けが異なるということである。従来の言語研究は **convention** ないし知識の発掘を中心になされてきた。一般化のし易さからそれは当然のことではある。しかし、発話過程、聞き手から言うと読み取りの過程、の記述・説明は、今尚十分とは言い難い。**Ricardian** の特徴とされる、例えば '**a two-voiced ironic utterance**' (**Burrow 1971: 40**) といった現象は発話過程を経て生起する現象だが、何故またいかにそのようになるのかは必ずしも明らかにはされていない。本発表では、**Chaucer** の発話過程にどのような要素が介在し、それは意味生成にどう寄与するのか、彼が使った形容詞(**good, sely, semely, gentil, etc.**)に着目して、その一端を解明してみたい。形容詞は話し手の判断や態度を巧みに凝縮して表わす表現形式で、詩人の発話過程を表わす一つの小宇宙をなしている。適時他の **Ricardian Poets** の例も参照しながら検証したい。